

NPO法人3・11甲状腺がん子ども基金 2022年度活動報告書



3・11甲状腺がん子ども基金
3・11 Fund for Children with Thyroid Cancer

NPO法人3・11甲状腺がん子ども基金

事務局移転しました

【事務局】160-0004

東京都新宿区四谷1-7 装美ビル602号

☎ 03 5369 6630

✉ info@311kikin.org



【ご寄付】

●郵便振替

記号番号 00100-3-673248

口座名 3・11甲状腺がん子ども基金

●銀行振込

城南信用金庫 営業部本店

普通預金 847987

特定非営利活動法人 3・11甲状腺がん子ども基金

子どもたちの未来のために

2011年3月、東京電力原子力発電所事故により、
放射性物質が放出されました。

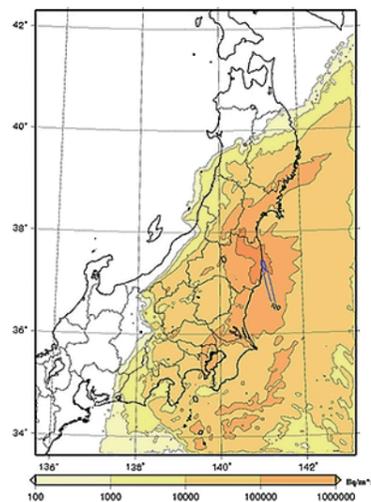
チェルノブイリ原発事故で子どもの甲状腺がんが増えた経験から、
福島県では、子どもたちの甲状腺の状態を把握し、
健康を長期に見守ることを目的に、
事故当時18歳以下で福島県にいた38万人を対象に
甲状腺検査がおこなわれています。

これまで福島県県民健康調査で甲状腺がんと診断された人は
300人を超えています。

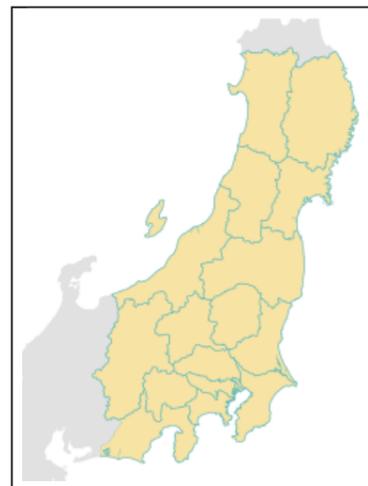
さらに当基金の活動により、公表数以外に50人以上の患者が
存在することが明らかになっています。

3・11甲状腺がん子ども基金は、

国の研究機関が発表した放射性ヨウ素拡散シミュレーション図に基づいて、
福島県を含む1都15県で甲状腺がんと診断された人に療養費を給付しているほか、
一人ひとりの不安や悩みにこたえられるサポートをめざし、活動しています。



出典：日本原子力研究開発機構
日本原子力研究開発機構による
放射性ヨウ素拡散シミュレーション図



基金の給付対象地域
(原発事故当時の居住地)



ごあいさつ

新型コロナウイルス感染の影響はようやく薄らいで参りましたので、感染対策支援金は前年度で終了させていただきました。今年度の手のひらサポートでは療養費の増額及び広報活動強化によりまして新規で24人の申請を受けることができましたことは大きな成果だったと思います。

福島県民で甲状腺がんと診断された方はこれまでに判明しているだけで352人になります。原発事故当時18歳以下であった検査対象者約38万人の中からこれほど多くの方が甲状腺がんを発症しているにもかかわらず県民健康調査検討委員会では被ばくの影響を否定し、多発は過剰診断の可能性が高いとしています。そして過剰診断という言葉は科学的根拠が示されないまま広く流布し、今年度の日本甲状腺学会でも発表されました。当基金申請者からの情報をまとめて考えますと、到底過剰診断と言うことはできませんので、専門医にも実情を知っていただきたく、甲状腺学会でも基金が把握している事実を発表いたしました。これからも積極的に専門家、マスメディアへの発信を続けてゆきたいと考えております。

更に今年度は3回目となるアンケート調査を行い、当事者の声をまとめて県民健康調査課、検討委員会、環境省にも届け、記者会見も行いました。その結果を元に当事者を含めた対面とオンラインによるハイブリッドシンポジウムを行うことができました。

当基金の事業とは別ですが、甲状腺がんとなった若者6人が東電を相手に起こした損害賠償訴訟は新たに1人が加わり原告7人となりました。原告全員による意見陳述は終わり、これから被ばくとの相関関係が争われます。科学的に納得のできる公正な判決が得られることを望んでおります。

当基金の多方面に亘る支援、広報活動を継続できますのもみなさまのご理解とご支援があってこそと、改めて心よりお礼を申し上げます。これからもどうぞよろしく願い申し上げます。

2023年7月

NPO 法人3・11 甲状腺がん子ども基金

代表理事

崎山比早子

(医学博士、元東京電力福島第一原子力発電所
事故調査委員会[国会事故調]委員)



※福島県の県民健康調査甲状腺検査は2011年10月に開始され、20歳までは2年に一度、20歳を過ぎると5年に一度、超音波による検査が行われています。これまでに、検査の問題点が多々見つかっています。

療養費給付事業

手のひらサポート

「手のひらサポート」は、東京電力福島第一原発事故以降に甲状腺がんと診断された方に、療養費として経済支援を行う事業です。昨年度、療養費の増額を実現することができました。

●対象者は？

2011年の原発事故当時18歳以下で下図の地域に居住し、その後甲状腺がんを発症された方

対象の都県



療養費項目	旧給付額	新しい給付額
基本給付 (甲状腺がんの診断/手術)	10万円	15万円
再手術 (再発や転移など)	10万円	15万円
アイソトープ(RI)治療	10万円	15万円
RI治療複数回	2回目以降 5万円/回	10万円/回

アイソトープ(RI)治療とは

アイソトープ治療とは、甲状腺がん細胞が肺など遠隔の組織に転移した場合に、放射性ヨウ素のカプセルを飲んでがん細胞を破壊する治療です。甲状腺全摘後、再発を防ぐ目的で、残った甲状腺組織を取り除くために行うアブレーション治療も含まれます。

●一人ひとりの不安や悩みにこたえて

当事者へのヒアリングやアンケートを通して、さまざまなことがわかってきました。再発や転移で再手術を受ける人、アイソトープ(RI)治療が必要で、複数回の治療を受ける人もいます。術後の妊娠・出産では甲状腺科に通う必要が生じたり、進学・就職で地元を離れた後も主治医への定期通院の交通費が負担な人もいます。また、ひとり親への特例など、一人ひとりの不安や悩みにこたえて支援を拡大してきました。



このほか、ひとり親支援、術後の妊娠・出産支援、通院交通費の助成などの支援を実施しています。(P10参照)



第7期療養費給付事業

事故当時ゼロ歳の人からも申請、増額分遡及給付に大きな感謝の声

原発事故から12年がたち、対象者の年齢も満30歳までとなりました。一方、事故当時ゼロ歳だった方お二人(福島県内・県外各一人)の申請もあり、新規申請は24人にのびりました。今年度、福島県内での戸別配布など広報に力を入れた成果です。ただ、再手術やRI治療の人が少し目立っており、懸念されます。新型コロナ感染への特例給付は13人で、後遺症が長引いたという方が若干いらっしゃいました。妊娠・出産支援は今年度8人の方から申請があり、第二子出産の方もありました。

今年度は療養費増額分の遡及給付もあり、単年度としては非常に大きい療養費額となりましたが、当事者の方々からは感謝の声をたくさんいただきました。皆さまからのご支援の賜物です。

【第7期給付実績】(2022年4月1日～2023年3月31日)

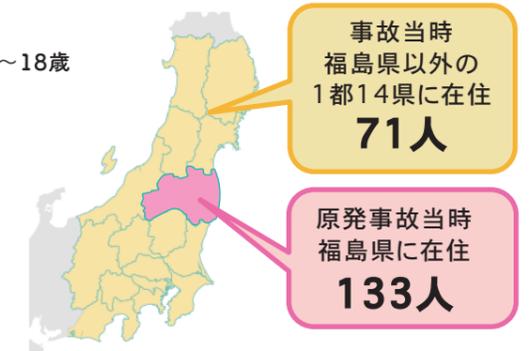
新規申請(事故当時0～18歳)	24人(福島15、県外9)	} 10,731,562円
再手術(複数回の方含む)	8人(福島4、県外4)	
RI(複数回含む)	10人(福島5、県外5)	
付加給付	18人(うちコロナ感染13)	
妊娠・出産支援金	8人(福島4、県外4)	
通院交通費助成	17人(福島10、県外7)	
療養費増額に伴う遡及給付	169人(福島110、県外59)	

2022年度療養費給付金額
合計23,881,562円

※これまでの給付人数は200人を超え、給付総額は約6600万円となっています。

福島県133人(男性56人、女性77人)
県外 71人(男性14人、女性57人)
特例 7人

事故当時年齢 0歳～18歳



給付人数 延べ211人
給付総額 約6630万円
(2016年12月～2023年3月末)

【参考】福島県県民健康調査の現状(2023年7月20日検討委員会発表まで)

	1巡目検査 (11-13年度)	2巡目検査 (14-15年度)	3巡目検査 (16-17年度)	4巡目検査 (18-19年度)	5巡目検査 (20-22年度)	節目検査 (17年度～)		計
						25歳	30歳	
悪性ないし 悪性疑い	116 (良性1)	71	31	39	34	22	3	316 (良性1)
受診者数	300,472 (81.7%)	270,552 (71.0%)	217,922 (64.7%)	183,410 (62.3%)	113,852 (45.0%)	11,781 (9.1%)	1,524 (6.7%)	

※このほか、集計外として43人が公表されており、さらに基金での把握例も8人で、少なくとも360人以上が甲状腺がんと診断されていることは明らかとなっています。

◎手のひらレターで情報の共有

手のひらサポート受給者の皆さんに、ほぼ季刊で情報紙「手のひらレター」をお送りしています。今年度も、セラピーヨーガ動画公開、療養費増額、交流会（福島で開催）、福島県への申入れ、3月のシンポジウムなど、お知らせと情報の共有に努めています。



◎療養費増額に伴いアンケートを実施、報告書を電子版で公表

今年度、療養費を増額し、既に受給した人にも治療状況に応じて増額分を給付し、それに伴い、簡単なアンケートを実施しました。質問は、現状（進学・就職など）、健康面・生活面での状況、行政に望む事の4点で、福島県129人中112人（86.8%）、福島県外65人中56人（86.2%）の回答率でした（2022年7月～10月25日）。結果を『手のひらサポートアンケート-甲状腺がん当事者の声2022』としてまとめ、国会や福島県の図書館、福島県県民健康調査検討委員会委員、メディア、研究者など関係者に広く送付・配布しました。基金ウェブサイトより無料で電子版をダウンロードできます。ぜひご覧ください。

当事者は手術後もさまざまな心配を抱えており、継続的な見守りや支援が必要です。以下に、内容の一部を紹介します。



【健康面】日々の体調、再発・転移への不安

- 疲れやすい。将来が不安(26・女性・福島)
- 体力がなく学校から帰ってくると夕食を食べずに眠っている(16・男性・福島/母)
- 大汗をかく。疲れやすい。寝てばかりいる。本人は気付かないことが多い(21・女性・宮城/母)
- 再々手術の可能性がある(24・女性/母・福島)
- RI治療では取り切るのが難しそうな病巣が残っている(23・女性・東京)
- リンパ節の転移がまたあるかもしれない(17・女性/母・栃木)

出産した人は増えていても、やはり不安が...

- 妊娠により甲状腺機能やサイログロブリン値が変動し、体も疲れやすく、病院の受診がしんどくなってきた。またコロナ増加のため、毎回の通院も人が多く不安(28・女性・群馬)
- 妊娠・出産できるか、健康な子が産めるか。医者からは検査していれば大丈夫だとは言われているが、心配な部分がある(27・女性・福島)
- 自分が今後子どもを産む機会があるとしたら、食事制限ではなく、薬を飲むようになると聞いて不安が大きい(28・女性・福島)

【生活面】仕事への影響、医療費・通院費、保険

- 休みがちで給料面が心配(26・女性・福島)
- 病院によく行くので出費が多い(27・女・福島)
- 定期的な通院により、居住地、働ける時間が制限される(23・女性・東京)
- 医療保険を考えるようになったが、入れないか月々の料金が高額になると思うと加入できない(26・女性・福島)
- 生命保険の加入ができない。または金額が高い(23・男性・茨城)

甲状腺検査、行政への要望

- 初期の段階でがんの治療ができるよう、今後も学校などで検査を継続してほしい(25・女性・福島)
- 20歳以上の人の検査があまり見られない。増やすとよいと思う(21・男性・福島)
- 何の前触れもなく発症しているので学校や企業の定期検診に組み込んでよいと思う(26・女性・埼玉)
- 検査費用が高額、薬も一生飲まないといけないので、補助金が出たらいいと思う(17・女性・栃木/母)

◎福島県内4つの市で戸別配布による広報

年度は福島県内の福島市、伊達市、郡山市、いわき市の4つの市で、「手のひらサポート」を広報し、申請の増加に努めました。また、福島県内のすべての中学生に学校を通して配布されるという、リビング新聞中学生版「てとて+」にも広告を載せるなど、広報に注力しました。メディアでの広報と合わせて、こうした広報活動で、申請数は増加しました。今後も広報に努めます。



戸別配布のリーフレット▶
写真撮影は亀山ののこさん

◎福島県県民健康調査課への申し入れ

12月1日、2022年のアンケートに寄せられた行政への要望をまとめ、報告書を手渡すとともに、県民健康調査課への要望を行いました。

要望の概略は、右記のとおりです。調査課は佐藤課長が対応してくれましたが、「要望をお聞きするだけ」の姿勢に終始し、福島県民として原発事故を経験し、甲状腺がんになり患した若者が既に350人以上いるという事実を直視していません。今後も粘り強く、要望していきます。

福島県への要望（概要）

1. 甲状腺がん当事者の声を聴き、支援の充実を

- ① 当事者の抱えている問題、県への要望を直接聞き取る機会の実現
- ② 甲状腺検査サポート事業を当事者に使いやすい制度へ改善

2. 県民健康調査の成果と当事者の実態を正確に把握し議論を進めるよう、県がイニシアチブをとり、検討委員会に提案を

- ① 県の甲状腺検査の成果は早期発見・早期治療の成果をあげている。学校検査の継続、20歳以上の検査機会の拡充を。
- ② 福島県では甲状腺がん患者の「男性比率」が高いことの分析の実施

◎記者会見と報道

- 8月9日 「療養費増額と基金申請の状況からみた甲状腺がんの実情を発表」朝日新聞、福島民報、福島民友などで報道
- 11月8日 聖教新聞「アンケート報告書の紹介と検査の意義」を紹介
- 12月1日 上記の福島県への申し入れ後に、オンラインも併用して発表。福島民報、福島民友、河北新報、朝日新聞などで報道
- 3月20日の週 郡山市コミュニティFM・ココラジの「ボイス・オブ・こおりやま」で、基金の活動とシンポジウム紹介のスポット放送
- 3月25日 シンポジウム「原発事故と甲状腺がん 当事者の声をきく Vol.3」終了後に当事者を含めて記者会見 河北新報、福島民報、政経東北、日々の新聞などで報道



▲12月2日福島民報



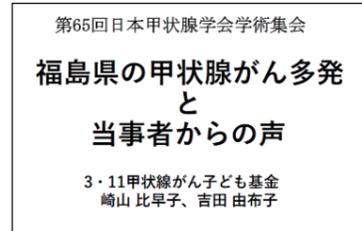
4月7日河北新報▶

◎福島県の甲状腺検査の問題点と当事者の状況などを、2つの学会で発表

①第6回日本甲状腺学会学術集会(2022年11月1-3日、大阪市)

「ぜひこうした試みを続けてほしい」と学会員の声

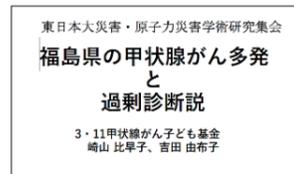
基金の崎山・吉田の連名で、「福島県の甲状腺がん多発と当事者からの声」と題するポスター発表を行いました。3日に崎山が会場で報告し、出席した学会員からは「医師は当事者の声をまとめて発表することはほとんどないので、この発表は貴重で、続けてほしい」という声をいただきました。



②東日本大震災・原子力災害学術研究集会(2023年3月17日、福島市)

福島県双葉町につくられた東日本大震災・原子力災害伝承館が主宰する学術集会が開かれることがわかり、基金も発表を申し込みました。日本原子力学会を含め13団体が後援するこの研究報告会では初めての取り組みでした。崎山が発表した「福島県における甲状腺がんの多発と過剰診断説」では、基金申請者の実情から「過剰診断」はありえないことをデータで発表。吉田が「福島県で甲状腺がんと診断された若者の支援ニーズに関する考察」で、当事者の声を聞き、ニーズにこたえる行政の支援の必要性を訴えました。

2人の発表時は、館長である高村昇氏(現検討委員会座長)も会場で傍聴していました。伝承館は資料収集も行っているため、基金の当事者アンケート報告書2種類を献呈しました。



◎シンポジウム「原発事故と甲状腺がん 当事者の声をきく vol.3」開催



3月25日、第3回目のシンポジウム「原発事故と甲状腺がん—当事者の声をきく vol.3」を、はじめて会場(郡山市ミュージカルがくと館)とオンラインのハイブリッドで開催しました。基金の武藤の司会で進行し、第1部は「基金データから見る「過剰診断論」の問題点」を崎山が、『手のひらサポートアンケート2022』に寄せられた声を吉田が発表しました。内容は、伝承館学術集会での発表とほぼ同様のものです。

第2部では事故当時田村市在住の渡辺さん(25歳女性)が初めての発言をボイスメッセージで、郡山市の鈴木さん(26歳女性)はオンラインで、福島市の林竜平さん(22歳男性)は実名・顔出しで会場発言してくれました。状況はそれぞれ異なりますが、「自分たちの声を聞いて、当事者のことをわかってほしい」という気持ちは共通しています。ゲストとして検討委員会委員でもある福島大学の富田哲先生、当事者アンケート協力者である山口大学の高橋征仁先生からコメントと当事者との質疑を行いました。また、事故直後、高汚染を知らされず浪江町で原発近からの避難者の炊き出しなどに従事し、後に甲状腺がんを発症した菅野みずえさんが避難先の関西から駆けつけて発言してくださいました。最後に基金の満田が「健康状態も思いもさまざまな生身の人間がいるということ。その生身の人間に向き合うことが大切だということが再確認できた。検討委員会や行政は、甲状腺がん当事者の声・実相に向き合ってほしい」とシンポジウムを締めくくりました。

当事者参加での会場開催ははじめてでしたが、オンラインを含め参加者は250名近くにのぼり、「当事者の声の音が聞けたことがよかった」「菅野さんの話を聞いて良かった」との感想を多くいただきました。

当事者参加での会場開催ははじめてでしたが、オンラインを含め参加者は250名近くにのぼり、「当事者の声の音が聞けたことがよかった」「菅野さんの話を聞いて良かった」との感想を多くいただきました。

シンポジウムでの当事者と菅野さんの発言より(一部抜粋)

渡辺さん



苦しんでいる若者に目を向けてほしい

震災当時中学1年でした。原発事故については何が何だかわからない状況でしたが、両親が避難した方がいいと言って翌日避難しました。避難するまでは、家の中に放射能が入らないよう、ドアの隙間をテープで埋めていました。翌日外に出た時、空気が淀んでいる、濁っているという感じがしました。

甲状腺検査の1巡目は問題なしでしたが、2巡目で結節を指摘され、経過観察し、2019年に1センチを超え、手術を勧められ、半摘しました。

体調は良好ですが、食事のヨウ素制限をしながら甲状腺のホルモンバランスをとる療法を行っています。この制限がいつまで続くのか、普通の食事ができる可能性があるのか、その場合再発することはないのか、とても心配です。

いま、国が原発事故について責任を問われている事があると思いますが、私たちみたいに苦しんでいる若者がいることに、まず目を向けてほしい。それを知ったうえで責任がない、あるという判断をしてほしいなと思います。

林さん



我々をしっかり見て、その声をきいてほしい

事故当時は小学4年生。10~11歳くらいだったので、原発事故が起きたと言われても、何だそれ、そもそも福島に原発というものがあつたんだくらいの感覚でした。ただ万が一を考えて、外出や外遊びはなるべくしないようにしていました。

検査1巡目は何もなくA1、中学の時の2巡目でA2、高校の時にBとなり、二次検査を受けて、がんと診断されました。告知されてすぐ、スマホで予後や生存率などを意外と冷静に調べていましたが、いま思うとがんが怖すぎて、怖すぎたからこそ一周まわって冷静になったという感じでした。

手術は半摘で、1年ほどヨウ素制限がありました。今は普通に生活しています。今年で術後6年を迎えました。

原発については多少関係があるとは思いますが、それほど気にしていません。検査を受けて、手術して、いまこうして発言できているというのがすべてです。過剰診断等に関しては、怒りや悲しさを覚えます。見つけても治療しなくていいのなら、治療せず経過観察すればいいと思う。医療、心理、福祉、人権などいろんな専門家が連携・協力して、行政にも当事者の声をきいてほしい、我々をしっかり見てほしいと思います。

鈴木さん



自分の思いを共有できる場が大事

原発が爆発するかも、との父の一言と、母が泣いていたことを知った時、事態の深刻さを感じました。放射能を浴びないよう気をつけていましたが、給水のために外に出た時が一番放射能の高いときだったと後で知りました。

最初の甲状腺検査は問題なく、2巡目B判定となり二次検査で8ミリの結節、3巡目で11ミリと増大し、同時期にバセドウ病も発症・診断されました。細胞診後、甲状腺がんもバセドウ病に対して甲状腺全摘となりました。

悩んだことは多々ありますが、アクティブに動くことが好きだったのに、経緯を知らない人に、もともと疲れやすい体質と思われることが嫌です。ぎりぎりのホルモン値で頑張っているんですと叫びたいくらいです。甲状腺がんや術後の状況への理解が深まってほしいです。

今は、「薬を毎日飲まなきゃいけない」から「自分に必要だから飲む」という意識が変わりました。家族・友人など近しい人に打ち明けられる環境があったからこそです。自分の意見や思いを共有できそうという場を作ることが大事だと思います。今日のシンポジウムが誰かの背中を押す形になれば嬉しいです。

菅野みずえさん



若い人たちに、こんなに苦勞を掛けてきたんだと思うと、申し訳ないと思っています。最初にそれを思ったのは、私のがんの告知を受けた時です。告知を受けて家までの峠道で、先だって受けた穿刺の痛さと怖さを小学生までが体験しているんだと思うと、これは本当に大人の責任だと思いました。

白い防護服の男が来て「ここは危ない」と言った時に、あなたはどこの誰で、どれくらいの値があるかとなぜ問い詰めなかったのか。スクリーニングで10万cpmの針が振り切れた人は沢山いました。でも私が受けたスクリーニング場所の記録は、1週間、まったくありません。そんなことありえるのでしょうか。もっと全国的に、少なくとも関東以北の子どもたちは調べられてしかるべきです。どこの自治体でもやろうとしたはずですが、でも記録がないことで曖昧になりました。責任に伝えられる大人でありたいと思っています。

どうかご同輩のみなさん、声をあげていきましょう。

2022年度会計報告

貸借対照表(2023年3月31日現在)

資産の部		負債の部	
現預金	23,841,659	未払金	394,284
貯蔵品	8,470	預り金	75,149
立替金	6,863		
資産合計	23,856,992	正味財産の部	
		正味財産額	23,387,559
		負債及び正味財産合計	23,856,992

収支の内訳(自2022年4月1日 至2023年3月31日)

収入		支出	
受取寄付金	9,865,491	事業支出	31,096,263
受取会費	723,000	(うち療養費給付)	23,881,562
その他収益	654,073	管理費	1,161,712
収入の合計	11,242,564	支出の合計	32,257,975

*事業支出とは、基金のすべての事業にかかる経費です。なお、詳細な決算報告はWebサイトにて公開しています。

暖かいご支援、ありがとうございます。

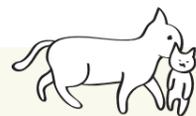
当事者の声や実情を広く発信していけるのは、基金しかありません。

これからもご支援よろしく願いいたします。

原発事故から12年がたち、また国内外での大きな災害や事件が起きているなかで、原発事故の被害や甲状腺がんに関する報道も減ってきています。そのような中で、変わらぬご支援をいただいておりますこと、心よりお礼申し上げます。

療養費申請状況やアンケートからもわかりますように、再手術やRI治療、日々の体調からくる将来への不安など、当事者の悩みはなお大きく、長期的な見守りや支援が必要です。このため、今年度、療養費の増額を実施いたしました。遡及給付を含め、全体の療養費額は大きな額となりましたが、厳しい情勢のなかでのこの給付には、当事者の皆さまから大きな感謝の言葉をいただいております。

事故から変わらず関心と厚意を寄せて下さる方、甲状腺がんの方たちの実情を初めて知りましたと新たに寄付を寄せて下さる方、イベントなどで寄付を募って送って下さる方、多くの方のご支援で、210人を超す子どもたち・若者たちへのサポートが実現できています。でもまだ支援の届いていない方もいらっしゃいます。どうぞこれからも基金の活動と子どもたちへの暖かいご支援をよろしく願い申し上げます。



事務所移転しました

これまで事務所として使用していたビルが建て替えということになり、急遽、事務所を移転しました。新事務所は同じ四ツ谷で、住所は下記の通りです。電話番号は変わりません。

〒160-0004 東京都新宿区四谷1-7 装美ビル602号 ☎03-5369-6630

2023年度の取り組み

療養費給付事業 第8期(2023年4月～2024年3月)

「手のひらサポート」の療養費給付事業も第8期目となりました。対象者は1992年4月2日以降の生まれた方(今年度満31歳になる方まで)で、原発事故以降に甲状腺がんと診断・手術された方です。基本の給付以外にも、手厚い支援を展開しています。対象地域はp3の地図をご覧ください。

甲状腺がんの診断・手術	再手術	アイソトープ治療	アイソトープ治療複数回	手術後の妊娠・出産支援金	手術後の通院交通費助成
15万円	15万円	15万円	2回目以降 10万円/回	5万円	上限5万円/年

基金はこれまでに200名を越す方から申請をいただいておりますが、まだ基金を知らない方々もたくさんいらっしゃいます。今年度も広報に努め、多くの甲状腺がんの皆さんに支援を届けたいと思います。

相談・フォローアップ

電話やメールでの相談を随時受け付け、必要に応じて、専門家につなぐなどの支援を継続。

「手のひらレター」で情報発信し、当事者のニーズやリクエストに基づいた支援や交流の場をつくります。

情報発信と調査・提言

- 甲状腺がん当事者の実情を発信し、福島県県民健康調査甲状腺検査を検証
 - ・当事者の状況を広くお知らせし、甲状腺検査や過剰診断論の問題点を広く公表していきます。2023年8月8日、NHK・Eテレ・ハートネットTV(20時～20時半)で、基金が協力した「福島・甲状腺がん 語りはじめた若者の声をきく」が放映。
 - ・日本甲状腺学会などの学術集会で、福島県の甲状腺検査の問題点や当事者の状況を、専門家にこそ知ってもらうための発表・報告に努めます。
- 福島県や環境省への要望
 - 甲状腺がん当事者への実効性ある支援制度の構築と検査の充実を図るよう要請
- シンポジウムの開催
 - 今年度も当事者の参加するシンポジウムを開催
- 新しいリーフレットを作成しました!
 - A4三つ折りで普通封筒に入るタイプです。
 - 広報にご協力ください!!



必要な方に必要な支援が届きますよう、どうぞ、皆さまのお力をお貸しください。

3・11甲状腺がん子ども基金 新リーフレット